

# 大人の食意識と小・中学生期の食育の関係に関する考察

安嶋 まなみ<sup>\*1</sup> 山下 良平<sup>\*2</sup> 住本 雅洋<sup>\*3</sup>

## 要 旨

子どもへの食育は、大人になってからの食生活に良い影響をもたらすことが期待されている。本稿では、大人の食意識と、小・中学生期の家庭ならびに学校で受けた食育がどのような関係があるかを分析する。大人の食意識としては、栄養や食事マナーへの意識、地産地消への意識、食料生産者の持続的活動への意識を取り上げる。順序ロジットモデルを用いた分析から以下の点が明らかになった。栄養や食事マナーへの意識は家庭と学校での食事の際の食育経験と正の関連があった。また、地産地消への意識は、家庭において、地産地消や食べ物が作られる環境の問題を聞いた経験、イベントへの参加した経験と、学校において食べ物が作られる環境の問題を学習した経験が正の関連があった。食料生産者の持続的活動への意識は、家庭において、地産地消や食べ物が作られる環境の問題を聞いた経験、イベントへの参加した経験と正の関連があった。

キーワード：食育／食意識／順序ロジット分析

## 1. はじめに

2005年に食育基本法が制定された。この背景として、同法の前文では、栄養の偏り、不規則な食事、肥満や生活習慣病の増加、過度の痩身志向という、食事と健康にかかわる問題が指摘されるだけでなく、「食」の安全、「食」の海外への依存が指摘されている。そして、食育基本法において、「様々な経験を通じて「食」に関する知識と「食」を選択する力を習得し、健全な食生活を実践することができる人間を育てる食育を推進することが求められている」と述べられている（「食育基本法」前文）。食育はすべての世代を対象とするものではあるものの、子どもへの食育は「心身の成長及び人格の形成に大きな影響を及ぼし、生涯にわたって健全な心と心身を培い豊かな人間をはぐくんでいく基礎」とも前文において述べられており、子どもの食育が重視されているように見受けられる。

この子どもへの食育は、大人になってからの食生活に良い影響を及ぼすことが期待されているものと考えられる。この点について検討するため、本稿では、子どものときに経験した食育が大人になってからの食生活への意識にどのように関係しているかを分析する。

これまで、過去の食生活や食育と、大学生になってからの食生活等との関係を分析したものとして、たとえば、小林（2003）、岡本・武藤（2014）、井

上ら（2019）がある。これらは、アンケート調査のなかで、小学生のときの食育や食生活に関して回想（記憶）に基づいた情報と、調査時点での食生活の状況等を質問しており、主として、家庭での経験に注目していた。食育基本法以前より、学校でも、食事と健康の問題以外にかかわる食育の取り組みも行われていたと考えられるが、これまであまり注目されていないように見受けられる（注1）。また、大学生を対象に調査した研究はあるが、20代から40代を調査対象としたものはあまりないとみられる。

そこで、本稿では、小・中学生期に家庭あるいは学校教育で受けた食育が、現在の食生活の意識にどのように関係しているかを明らかにすることを課題とする。ただし、大人を対象としたアンケート調査を用いるため、本稿においても、小・中学生期の食育の内容について、回想したもの（記憶）となる。ただし、大人の場合、大学生に比べると、子どものときの食育以外にもさまざまなことを経験しているため、それらを制御して分析することは困難であり、その点で、限定的な分析に留まることになる。その一方で、このような限定の下とはいえ、これまで評価されてこなかった子どものときの食育と大人の食生活の意識の関係についてみることで自体に一定の意義があるものと考えられる。

## 2. 分析の枠組み

本稿では、20～40代の男女を対象として、食生活等に関わる意識と、小・中学生期に家庭あるいは学校教育のなかで受けた食育の関係を分析する。

<sup>\*1</sup> 石川県立大学大学院 生物資源環境学研究科  
自然人間共生科学専攻

<sup>\*2</sup> 石川県立大学 生物資源環境学部 環境科学科

<sup>\*3</sup> 石川県立大学 生物資源環境学部 生産科学科

大人になった現在での食生活等に関わる意識として、具体的には、①栄養バランスや食事マナーに基づく食生活に対する意識、②地場産食材の消費への意識、③食料の生産者の持続的な活動への意識の3点に注目する。これは、食育の課題として、食事と健康の関係に関するものに留まらず、食の海外依存の問題が指摘されており、食の供給者への配慮も重要であると考えられるためである。

つぎに、小・中学生期の家庭または学校教育での食育としては、つぎの5項目とする。すなわち、(a) 栄養バランスを考えた食事、食べ残しをしない、食事の前後のあいさつ等について聞いた経験（食事の際の食育）、(b) 地産地消について聞いた経験、(c) 農家や漁家の生活実態について聞いた経験、(d) 食べ物が作られる環境の問題について聞いた経験、(e) 食生活や食材について学ぶ活動やイベントへの参加経験である（注2）。(a)とは異なり、(b)、(c)、(d)、(e)は、食がいかに関与されるかの知識に関するものであり、食の供給者への配慮へと通じるものと考えられる。

したがって、現在での食生活等に関わる意識のうち、①栄養バランスや食事マナーに基づく食生活に対する意識は食事の際の食育（(a)）に対応し、また、②地場産食材の消費への意識と③食料の生産者の持続的な活動への意識は食の供給に関する知識（(b)(c)(d)(e)）に関連していると考えられる。

そのため、分析1として、①栄養バランスや食事マナーに基づく食生活に対する意識は、(a) 食事の際の食育の経験との関係について分析する。また、分析2として、②地場産食材の消費への意識や③食料の生産者の持続的な活動への意識は、食の供給に関する知識、すなわち、(b) 地産地消、(c) 生産者の生活実態、(d) 食べ物が作られる環境の問題について聞いたり学んだりした経験や、(e) 食生活や食材について学ぶ活動やイベントへ参加した経験との関係について分析する。

分析には、上記の關係に、回答者の性別と年齢を加えて、順序ロジット分析を行い、推定結果について考察する。本稿の分析で順序ロジット分析を用いるのは、後述するように、被説明変数が4段階の順序変数であるためである。

### 3. 分析データ

本稿では、2020年3月に、インターネット・リサーチ会社である楽天インサイトの登録モニターを対象に行ったWEB調査の結果を用いる（注3）。回答者は、調査時点で石川県に在住し、義務教育期間を石川県で過ごした20歳以上50歳未満の男女である（注4）。調査費用の制約上、回答数が1000に達し

たところでデータ収集を打ち切った。

本稿は、家庭と学校での食育の影響について検討することを目的としている。家庭での食育の場として、同居する両親や祖父母といっしょに摂る食事が重要であると考えられる。そのため、小・中学生期の朝食・休日の昼食・夕食のすべてについて、同居の両親・祖父母の誰かと、「まれに一緒なことがあった」、「一緒ではなかった」、「覚えていない」を選択した回答者を分析対象から除外した。すなわち、小・中学生期の朝食・休日の昼食・夕食のいずれか少なくとも1つで、同居する両親や祖父母の誰かと「必ず一緒であった」「ほとんど一緒であった」を選択した回答者を分析対象とする。その結果、分析対象者数は906人となった。以下の分析では、さらに各分析の前提となる条件を満たさない回答者を適宜除外することとした。

つぎに、被説明変数となる、①栄養バランスや食事マナーに基づく食生活に対する意識、②地場産食材の消費への意識、③食料の生産者の持続的な活動への意識について説明する。①栄養バランスや食事マナーに基づく食生活に対する意識は、現在の生活で正しい栄養バランスや食事のマナーに基づいた食生活をどの程度意識しているかを尋ねたものであり、「強く意識している」「意識していることが多い」「意識していることは少ない」「全く意識していない」の4段階で回答を得た。②地場産食材の消費への意識は、地産地消に基づいた消費をどの程度意識しているかを尋ねたものであり、③食料の生産者の持続的な活動への意識は、生産者が持続的に活動できるよう正しい農法や適切な漁法によって生産された食べ物を買うことをどの程度意識しているかを尋ねたものである。これらについても、「強く意識している」「意識していることが多い」「意識していることは少ない」「全く意識していない」の4段階で回答を得た。

最後に、小・中学生期の食育に関する項目について説明する。(a) 食事の際の食育の経験、(b) 地産地消について聞いた経験、(c) 生産者（農家や漁家）の生活実態について聞いた経験、(d) 食べ物が作られる環境の問題について聞いた経験はいずれも、「頻繁に聞いた」「数回聞いたことがある」「1度くらい聞いたかも知れない」「1度も聞いていない」の4段階と「覚えていない」の5つの選択肢から回答を得た。また、(e) 食生活や食材について学ぶ活動やイベントへの参加経験も同様に、「頻繁にあった」「数回あった」「1度くらいあったかも知れない」「1度もない」の4段階と「覚えていない」の5つの選択肢から回答を得た。

これらの項目は、小・中学生期の食育に関する質問であるため、回答者には回想により回答してもら

表1 分析1に用いる変数の記述統計

変数の定義	平均	標準偏差
栄養バランスや食事マナーに基づく食生活に対する意識 (「強く意識している」=4～「全く意識していない」=1)	2.87	0.67
家庭での食事の際の食育経験 (「頻繁に聞いた」=4～「1度も聞いていない」=1)	3.37	0.80
学校での食事の際の食育経験 (「あり」=1、「なし」=0)	0.67	—
性別 (男=1、女=0)	0.45	—
年齢 (1歳きざみ、20～49)	37.84	7.75

注：サンプルサイズは761。

うことになる。そのため、「覚えていない」を選択した回答者は分析対象から除外する。また、学校での経験は、家庭での経験に比べると頻度が少なくなると考えられ、記憶のあいまいになりやすいと考えられる。そのため、上記の(a)～(e)のうち学校での経験は、「頻繁に聞いた(あった)」「数回聞いたことがある(あった)」を「あり」、「1度くらい聞いたかも知れない(あったかもしれない)」「1度も聞いていない(ない)」を「なし」という2段階の変数に変換する。

#### 4. 分析結果

##### (1) 分析1：栄養バランスや食事マナーに基づく食生活に対する意識との関係

本節では、栄養バランスや食事マナーに基づく食生活に対する意識と、小・中学生期の家庭または学校における(a)食事の際の食育の経験、性別、年齢との関係について分析する。先述したとおり、小・中学生期の家庭または学校における(a)食事の際の食育の経験について、「覚えていない」を選択した回答者は分析から除外した。そのため、サンプルサイズは761となった。分析に用いる各変数の記述統計を表1に示す。

順序ロジット分析による推定結果を表2に示す。

家庭での食事の際の食育経験(頻度)と学校での食事の際の食育経験はともに、統計的にゼロと有意差をもち正であった。このことは、家庭での食事の際の食育経験の頻度が多い人ほど、また、学校での食事の際の食育経験がある人ほど、栄養バランスや食事マナーに基づく食生活に対する意識が高いという関係を示している。なお、性別と年齢については、性別のみ統計的にゼロと有意差をもち負であり、女性の方が栄養バランスや食事マナーに基づく食生活に対する意識が高いという結果となっている。

表2 分析1の推定結果

	パラメータ	標準誤差
家庭での食事の際の食育経験	0.518**	0.095
学校での食事の際の食育経験	0.385*	0.162
性別	-0.332*	0.149
年齢	0.004	0.010
定数項1	-2.274	
定数項2	0.971	
定数項3	3.823	

注：1)サンプルサイズは761。Pseudo  $R^2 = 0.0356$ 。

2)\*\*、\*はそれぞれ1%、5%でゼロと有意差をもつことを表す。

##### (2) 分析2：地場産食材や生産者の持続的な活動への意識との関係

本節では、地場産食材の使用への意識や、生産者の持続的な活動への意識と、小・中学生期の家庭または学校において、(b)地産地消、(c)生産者の生活実態、(d)食料の生産する環境の問題のそれぞれについて聞いたり学習したりした経験、(e)食材や食生活について学ぶ活動やイベントへの参加経験、性別、年齢との関係について分析する。先述したとおり、小・中学生期の家庭または学校における上記の経験について、「覚えていない」を選択した回答者は分析から除外した。そのため、サンプルサイズは540となった。分析に用いる各変数の記述統計を表3に示す。

順序ロジット分析の結果は表4に示す。

まず、地産地消への意識については、家庭での経験としては、地産地消と食べ物が作られる環境の問題について聞いた経験、食生活や食材について学ぶ活動やイベントへの参加経験がいずれも統計的にゼロと有意差をもち正であった。また、学校での経験では、食べ物が作られる環境の問題について学習し

表3 分析2で用いる変数の記述統計

変数の定義	平均	標準偏差
地場産食材消費への意識（地産地消） （「強く意識している」=4～「全く意識していない」=1）	2.61	0.77
生産者の持続的な活動への意識（持続的活動） （「強く意識している」=4～「全く意識していない」=1）	2.45	0.78
家庭で地産地消について聞いた経験 （「頻繁に聞いた」=4～「1度も聞いていない」=1）	2.70	0.98
家庭で生産者の生活実態について聞いた経験 （「頻繁に聞いた」=4～「1度も聞いていない」=1）	2.59	0.96
食べ物が作られる環境の問題について聞いた経験 （「頻繁に聞いた」=4～「1度も聞いていない」=1）	2.21	0.99
家庭で食生活や食材について学ぶ活動やイベントへの参加経験 （「頻繁にあった」=4～「1度もない」=1）	2.16	0.96
学校で地産地消について学習した経験 （「あり」=1、「なし」=0）	0.52	—
学校で生産者の生活実態について学習した経験 （「あり」=1、「なし」=0）	0.53	—
学校で食べ物が作られる環境の問題について学習した経験 （「あり」=1、「なし」=0）	0.49	—
学校で食生活や食材について学ぶ活動やイベントへの参加経験 （「あり」=1、「なし」=0）	0.41	—
性別（男=1、女=0）	0.48	—
年齢（1歳きざみ。20～49）	37.32	7.79

注：サンプルサイズは 540。

た経験が統計的にゼロと有意差をもち正であった。このため、これらの経験が多い（ある）人ほど、食生活について地産地消をより意識していることを示している。また、性別は負、年齢は正で、どちらも統計的にゼロと有意差をもっており、男性よりも女性の方が、また、高年齢の人ほど、地産地消をより意識しているという結果となった。

つぎに、生産者の持続的な活動への意識については、家庭での経験として、地産地消と食べ物が作られる環境の問題について聞いた経験、食生活や食材について学ぶ活動やイベントへの参加経験が、いずれも統計的にゼロと有意差をもち正であった。このため、これらの経験が多い人ほど、食生活について生産者の持続的な活動をより意識していることを示している。また、学校での経験や、性別と年齢は統計的に有意ではなかった。

地産地消への意識と、生産者の持続的な活動への意識とは、重なる部分が多い考えられるものの、このように、生産者の持続的な活動に関する意識については、学校での経験や、回答者の性別・年齢との関係が認められない点で、地産地消への意識とは異

なる傾向があることが示された。

## 5. 結論

本稿では、大人の食意識について、小・中学生期の家庭や学校における食育の経験がどのように関係しているかを分析した。その際、大人の食意識として、正しい栄養バランスや食事マナーに基づく食生活への意識、地産地消に基づいた消費への意識、生産者の持続的な活動への意識を取り上げた。順序ロジット分析により以下の点が明らかになった。

①家庭と学校での食事の際の食育の経験が多い（ある）ほど、正しい栄養バランスや食事マナーに基づく食生活への意識が高かった。②家庭において、地産地消と食べ物が作られる環境の問題について聞いた経験や、食生活や食材について学ぶ活動やイベントへの参加経験が多いほど、また、学校で食べ物が作られる環境の問題について学習した経験があるほど、地産地消に基づいた消費への意識が高かった。③家庭において、地産地消と食べ物が作られる環境の問題について聞いた経験、食生活や食材について学ぶ活動やイベントへの参加経験が多いほど、生産

表4 分析2の推定結果

	地産地消		持続的活動	
	パラメータ	標準誤差	パラメータ	標準誤差
家庭で地産地消について聞いた経験	0.520**	0.131	0.279*	0.133
家庭で生産者の生活実態について聞いた経験	0.029	0.141	0.244	0.146
食べ物が作られる環境の問題について聞いた経験	0.435**	0.133	0.444**	0.133
家庭で食生活や食材について学ぶ活動やイベントへの参加経験	0.432**	0.121	0.396**	0.121
学校で地産地消について学習した経験	-0.314	0.239	-0.318	0.240
学校で生産者の生活実態について学習した経験	-0.371	0.256	0.151	0.257
学校で食べ物が作られる環境の問題について学習した経験	0.505*	0.252	0.095	0.250
学校で食生活や食材について学ぶ活動やイベントへの参加経験	-0.064	0.217	-0.219	0.220
性別	-0.496**	0.178	-0.111	0.177
年齢	0.024*	0.012	0.020	0.012
定数項1	0.429		0.967	
定数項2	3.668		4.076	
定数項3	6.246		6.452	
サンプルサイズ	540		540	
Pseudo $R^2$	0.122		0.109	

注：\*\*、\*はそれぞれ1%、5%水準でゼロと有意差をもつことを表す。

者の持続的な活動への意識が高かった。

全体として、家庭での食育の記憶は、大人になってからの食意識と、一定の関連が見られたと考えられる一方で、学校での食育の記憶については限定的なものであった。ただし、学校での食育の在り方によるものか、あるいは、記憶の曖昧さによるものかを判断することは容易ではない。本稿では、こうした回想された情報の不確実性や、子どものときの食育以外の影響など、十分に考慮できたとはいえない。こうした点を考慮した調査・分析は、今後の課題としたい。

#### 注釈

1. 佐藤(2008)は、大学生を対象とするアンケート調査から、学校での食育も効果を有していたことを明らかにしている。

2. アンケート調査において、(b)地産地消の話題の例として、食べている料理での地場産食材の使用、地場産食材の鮮度の良さや安心感を示した。また、(d)食べ物が作られる環境の問題の話題の例として、海洋汚染や耕作放棄地を示した。
3. 本稿に用いるデータは、成人を対象とした小・中学生期の教育効果に関する研究の一環として収集されたものであり、その一部は染谷・山下(2021)で用いられている。染谷・山下(2021)は環境教育経験の評価等を対象としたものであるが、本稿では食育経験を対象としており、分析のために、染谷・山下(2021)と重複して用いられる質問項目は一部に限られている。
4. 回答者に義務教育期間に転居があった場合は、最も長く過ごした場所を想定した回答を求めた。

#### 引用文献

井上寿美香・片山久美子・陳曉倩・中村幸一郎・金子祐大・

- 齋藤すが代・戸川桂一・森重恵介・森本陽子・草平武志・吉村耕一・人見英里. 2019. 子どもの頃の食に関する経験が大学生の食生活に与える影響. 山口県立大学学術情報. (12) : 105-114.
- 岡本美紀・武藤慶子. 2014. 大学生の児童期の家庭での食教育が現在の食生活に与える影響. 長崎国際大学論叢. 14 : 195-203.
- 小林敬子. 2003. 過去の食に関する環境および体験が現在および未来の食生活に及ぼす影響. 学校保健研究. 45(3) : 200-217.
- 佐藤玲子. 2008. 大学生の学校と家庭における食教育の記憶. 尚絅学院大学紀要. 55 : 199-205.
- 染谷直希・山下良平. 2021. 義務教育期の環境教育経験に対する主観的評価と今後の展開に対する認識 - 成人後のフィードバック調査に基づく考察 -. 石川県立大学研究紀要. (4) : 33-40.

## **An Analysis of the Relationship between Adults' Food Consumption Awareness and their Experience of Food Education in Elementary and Junior High School Age**

Yasujima, Manami (Division of Sciences for Bioproduction and Environment, Ishikawa Prefectural University)

Yamashita, Ryohei (Department of Environmental Science, Ishikawa Prefectural University)

Sumimoto, Masahiro (Department of Bioproduction Science, Ishikawa Prefectural University)

### **Abstract**

Food education for children is expected to positively impact their eating habits after adulthood. This paper analyzed the relationship between food consumption awareness of adult people and their experience of food education at home and school in elementary and junior high school age. Awareness of nutrition and table manners, awareness of consuming locally grown foods, and awareness of supporting sustainable food production were adopted as food consumption awareness in this study. Ordered logistic regression analysis revealed as follows.

Adults' awareness of nutrition and table manners was related positively to their experience of "food education about taking a meal" at home and school. Adults' awareness of consuming locally grown foods was correlated positively with their experience of having heard of "local food" and "problems of the environment concerning agriculture and fishery" at home, their experience of having participated in "activities for learning dietary habit and food production" from home, and their experience of having learned "problems of the environment concerning agriculture and fishery" at school. Adults' awareness of supporting sustainable food production was related positively with their experience of having heard of "local food" and "problems of the environment concerning agriculture and fishery" at home, their experience of having participated in "activities for learning dietary habit and food production" from home.

Keywords: food education / food consumption awareness / ordered logit analysis